

# 連結決算の状況

## 連結財務諸表

当行の2022年3月期の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書及び連結附属明細表については、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、有限責任監査法人トーマツの監査証明を受けており、2022年6月24日付の監査報告書を受領しております。

本ディスクロージャー誌の連結財務諸表は、上記の連結財務諸表に基づき記載内容を一部追加・変更するとともに、様式を一部変更して作成しております。

### ●連結貸借対照表

(資産の部)		(単位：百万円)	
期別	2021年3月期	2022年3月期	
科目	(2021年3月31日現在)	(2022年3月31日現在)	
<b>(資産の部)</b>			
現金預け金	2,753,959	4,049,642	
コールローン及び買入手形	30,000	20,000	
買入金銭債権	98,202	116,411	
特定取引資産	12,157	13,370	
金銭の信託	80,015	79,448	
有価証券	3,326,241	2,801,655	
貸出金	5,541,154	5,931,315	
外国為替	34,417	30,546	
リース債権及びリース投資資産	69,989	68,041	
その他資産	141,736	152,789	
有形固定資産	33,778	34,378	
建物	11,016	11,546	
土地	11,337	11,144	
建設仮勘定	360	923	
その他の有形固定資産	11,064	10,764	
無形固定資産	4,747	4,628	
ソフトウェア	4,136	4,018	
その他の無形固定資産	611	609	
退職給付に係る資産	42,139	42,803	
繰延税金資産	2,023	1,780	
支払承諾見返	35,424	38,113	
貸倒引当金	△ 45,351	△ 41,129	
<b>資産の部合計</b>	<b>12,160,638</b>	<b>13,343,796</b>	
<b>(負債及び純資産の部)</b>			
期別	2021年3月期	2022年3月期	
科目	(2021年3月31日現在)	(2022年3月31日現在)	
<b>(負債の部)</b>			
預金	7,654,318	8,049,875	
譲渡性預金	139,665	132,507	
コールマネー及び売渡手形	676,745	1,504,861	
売現先勘定	77,627	53,041	
債券貸借取引受入担保金	784,779	322,484	
特定取引負債	3,066	4,279	
借入金	1,639,118	2,087,634	
外国為替	1,330	960	
信託勘定借	—	360	
その他負債	104,351	108,104	
退職給付に係る負債	11,667	11,653	
睡眠預金払戻損失引当金	823	499	
偶発損失引当金	1,316	1,341	
特別法上の引当金	12	12	
繰延税金負債	120,695	115,367	
支払承諾	35,424	38,113	
<b>負債の部合計</b>	<b>11,250,943</b>	<b>12,431,097</b>	
<b>(純資産の部)</b>			
資本金	52,243	52,243	
資本剰余金	59,181	59,176	
利益剰余金	492,869	512,403	
自己株式	△ 11,629	△ 11,576	
<b>株主資本合計</b>	<b>592,665</b>	<b>612,246</b>	
その他有価証券評価差額金	294,333	268,743	
繰延ヘッジ損益	4,426	15,670	
退職給付に係る調整累計額	14,594	12,266	
<b>その他の包括利益累計額合計</b>	<b>313,354</b>	<b>296,680</b>	
新株予約権	272	271	
非支配株主持分	3,402	3,499	
<b>純資産の部合計</b>	<b>909,694</b>	<b>912,698</b>	
<b>負債及び純資産の部合計</b>	<b>12,160,638</b>	<b>13,343,796</b>	

### ●連結損益計算書

		(単位：百万円)	
期別	2021年3月期	2022年3月期	
科目	(2020年4月1日から 2021年3月31日まで)	(2021年4月1日から 2022年3月31日まで)	
<b>経常収益</b>	<b>152,604</b>	<b>151,349</b>	
資金運用収益	77,797	72,803	
貸出金利息	43,276	41,893	
有価証券利息配当金	32,403	26,989	
コールローン利息及び買入手形利息	23	33	
預け金利息	571	3,257	
その他の受入利息	1,522	629	
信託報酬	2	7	
役務取引等収益	21,186	22,010	
特定取引収益	3,360	2,063	
その他業務収益	40,649	44,177	
その他経常収益	9,607	10,287	
償却債権取立益	85	25	
その他の経常収益	9,522	10,261	
<b>経常費用</b>	<b>120,456</b>	<b>113,301</b>	
資金調達費用	6,863	4,318	
預金利息	928	594	
譲渡性預金利息	10	6	
コールマネー利息及び売渡手形利息	△ 143	△ 167	
売現先利息	325	102	
債券貸借取引支払利息	429	291	
借入金利息	761	295	
その他の支払利息	4,551	3,195	
役務取引等費用	5,964	5,600	
その他業務費用	34,033	37,263	
営業経費	59,021	54,038	
その他経常費用	14,573	12,080	
貸倒引当金繰入額	8,882	1,800	
その他の経常費用	5,691	10,279	
<b>経常利益</b>	<b>32,147</b>	<b>38,047</b>	
特別利益	31	762	
固定資産処分益	31	762	
特別損失	364	754	
固定資産処分損	66	451	
減損損失	266	302	
金融商品取引責任準備金繰入額	3	0	
その他の特別損失	28	—	
<b>税金等調整前当期純利益</b>	<b>31,815</b>	<b>38,055</b>	
法人税、住民税及び事業税	11,684	8,950	
法人税等調整額	△ 2,394	2,254	
<b>法人税等合計</b>	<b>9,290</b>	<b>11,204</b>	
<b>当期純利益</b>	<b>22,524</b>	<b>26,850</b>	
非支配株主に帰属する当期純利益	140	182	
親会社株主に帰属する当期純利益	22,384	26,667	

### ●連結包括利益計算書

		(単位：百万円)	
期別	2021年3月期	2022年3月期	
科目	(2020年4月1日から 2021年3月31日まで)	(2021年4月1日から 2022年3月31日まで)	
<b>当期純利益</b>	<b>22,524</b>	<b>26,850</b>	
その他の包括利益	145,921	△ 16,752	
その他有価証券評価差額金	109,092	△ 25,662	
繰延ヘッジ損益	21,840	11,243	
退職給付に係る調整額	14,988	△ 2,334	
<b>包括利益</b>	<b>168,446</b>	<b>10,097</b>	
<b>(内訳)</b>			
親会社株主に係る包括利益	167,715	9,993	
非支配株主に係る包括利益	730	103	

## ●連結株主資本等変動計算書

2021年3月期（2020年4月1日から2021年3月31日まで）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	52,243	54,173	477,336	△ 11,789	571,964
当期変動額					
剰余金の配当			△ 6,851		△ 6,851
親会社株主に帰属する当期純利益			22,384		22,384
自己株式の取得				△ 0	△ 0
自己株式の処分		△ 6		159	153
連結子会社株式の取得による持分の増減		5,014			5,014
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	5,008	15,533	159	20,700
当期末残高	52,243	59,181	492,869	△ 11,629	592,665

	その他の包括利益累計額				新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	185,821	△ 17,414	△ 382	168,023	365	8,078	748,432
当期変動額							
剰余金の配当							△ 6,851
親会社株主に帰属する当期純利益							22,384
自己株式の取得							△ 0
自己株式の処分							153
連結子会社株式の取得による持分の増減							5,014
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	108,512	21,840	14,977	145,330	△ 93	△ 4,675	140,561
当期変動額合計	108,512	21,840	14,977	145,330	△ 93	△ 4,675	161,262
当期末残高	294,333	4,426	14,594	313,354	272	3,402	909,694

2022年3月期（2021年4月1日から2022年3月31日まで）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	52,243	59,181	492,869	△ 11,629	592,665
会計方針の変更による累積的影響額			△ 279		△ 279
会計方針の変更を反映した当期首残高	52,243	59,181	492,589	△ 11,629	592,385
当期変動額					
剰余金の配当			△ 6,854		△ 6,854
親会社株主に帰属する当期純利益			26,667		26,667
自己株式の取得				△ 0	△ 0
自己株式の処分			△ 5	53	48
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	△ 5	19,813	53	19,861
当期末残高	52,243	59,176	512,403	△ 11,576	612,246

	その他の包括利益累計額				新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	294,333	4,426	14,594	313,354	272	3,402	909,694
会計方針の変更による累積的影響額							△ 279
会計方針の変更を反映した当期首残高	294,333	4,426	14,594	313,354	272	3,402	909,414
当期変動額							
剰余金の配当							△ 6,854
親会社株主に帰属する当期純利益							26,667
自己株式の取得							△ 0
自己株式の処分							48
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△ 25,590	11,243	△ 2,327	△ 16,674	△ 0	96	△ 16,578
当期変動額合計	△ 25,590	11,243	△ 2,327	△ 16,674	△ 0	96	3,283
当期末残高	268,743	15,670	12,266	296,680	271	3,499	912,698

# ●連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

科 目	期 別	2021年3月期	2022年3月期
		(2020年4月 1日から 2021年3月31日まで)	(2021年4月 1日から 2022年3月31日まで)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>			
税金等調整前当期純利益		31,815	38,055
減価償却費		5,847	5,560
減損損失		266	302
その他の特別損益 (△は益)		31	—
貸倒引当金の増減 (△)		7,790	△ 4,221
退職給付に係る資産の増減額 (△は増加)		△ 21,282	△ 663
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)		△ 826	△ 13
睡眠預金払戻損失引当金の増減 (△)		△ 71	△ 323
偶発損失引当金の増減 (△)		331	24
特別法上の引当金の増減額 (△は減少)		3	0
資金運用収益		△ 77,797	△ 72,803
資金調達費用		6,863	4,318
有価証券関係損益 (△)		△ 9,042	△ 4,196
金銭の信託の運用損益 (△は運用益)		717	△ 549
為替差損益 (△は益)		△ 3	133
固定資産処分損益 (△は益)		34	△ 310
特定取引資産の純増 (△) 減		17,402	△ 1,234
特定取引負債の純増減 (△)		△ 377	1,199
貸出金の純増 (△) 減		△ 145,908	△ 390,161
預金の純増減 (△)		678,813	395,556
譲渡性預金の純増減 (△)		△ 118,008	△ 7,158
借入金 (劣後特約付借入金を除く) の純増減 (△)		853,171	448,515
預け金 (日銀預け金を除く) の純増 (△) 減		△ 9,303	6,987
コールローン等の純増 (△) 減		△ 26,511	△ 8,208
コールマネー等の純増減 (△)		△ 171,380	803,530
債券貸借取引受入担保金の純増減 (△)		247,409	△ 462,294
外国為替 (資産) の純増 (△) 減		△ 14,398	3,871
外国為替 (負債) の純増減 (△)		786	△ 370
リース債権及びリース投資資産の純増 (△) 減		△ 439	1,948
信託勘定借の純増減 (△)		—	360
資金運用による収入		81,171	74,871
資金調達による支出		△ 7,874	△ 4,257
その他		44,256	△ 5,264
<b>小計</b>		<b>1,373,485</b>	<b>823,204</b>
法人税等の支払額		△ 7,886	△ 13,022
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		<b>1,365,598</b>	<b>810,181</b>
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>			
有価証券の取得による支出		△ 913,255	△ 458,351
有価証券の売却による収入		294,629	678,233
有価証券の償還による収入		360,905	284,434
金銭の信託の増加による支出		△ 9,839	△ 7,240
金銭の信託の減少による収入		8,408	8,357
固定資産の取得による支出		△ 6,887	△ 8,224
固定資産の売却による収入		1,583	2,135
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		<b>△ 264,455</b>	<b>499,343</b>
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>			
自己株式の取得による支出		△ 0	△ 0
自己株式の売却による収入		0	0
配当金の支払額		△ 6,851	△ 6,854
非支配株主への配当金の支払額		△ 9	△ 7
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出		△ 382	—
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		<b>△ 7,243</b>	<b>△ 6,862</b>
現金及び現金同等物に係る換算差額		3	7
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)		1,093,903	1,302,670
現金及び現金同等物の期首残高		1,628,509	2,722,413
現金及び現金同等物の期末残高		2,722,413	4,025,083

財務データ

自己資本の充実の状況

流動性に係る経営の健全性の状況

報酬等に関する開示事項

## 注記事項

当連結会計年度（自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

## 1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社 11社

会社名

八十二証券株式会社  
八十二リース株式会社  
株式会社八十二カード  
八十二信用保証株式会社  
八十二システム開発株式会社  
八十二キャピタル株式会社  
八十二スタッフサービス株式会社  
やまびこ債権回収株式会社  
八十二オートリース株式会社  
八十二アセットマネジメント株式会社  
八十二インベストメント株式会社

(連結の範囲の変更)

八十二アセットマネジメント株式会社及び八十二インベストメント株式会社は新規設立により、当連結会計年度より連結の範囲に含めております。

(2) 非連結子会社 6社

主要な会社名

有限会社こだまインベストメント

非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益（持分に見合う額）、利益剰余金（持分に見合う額）及びその他の包括利益累計額（持分に見合う額）等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

## 2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の非連結子会社

該当ありません。

(2) 持分法適用の関連会社

該当ありません。

(3) 持分法非適用の非連結子会社 6社

主要な会社名

有限会社こだまインベストメント

(4) 持分法非適用の関連会社 2社

主要な会社名

ALL信州観光活性化投資事業有限責任組合

持分法非適用の非連結子会社及び関連会社は、当期純損益（持分に見合う額）、利益剰余金（持分に見合う額）及びその他の包括利益累計額（持分に見合う額）からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除いております。

## 3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は次のとおりであります。

3月末日 11社

## 4. 会計方針に関する事項

(1) 特定取引資産・負債の評価基準及び収益・費用の計上基準

金利、通貨の価格、金融商品市場における相場その他の指標に係る短期的な変動、市場間の格差等を利用して利益を得る等の目的（以下「特定取引目的」という。）の取引については、取引の約定時点を基準とし、連結貸借対照表上「特定取引資産」及び「特定取引負債」に計上するとともに、当該取引からの損益を連結損益計算書上「特定取引収益」及び「特定取引費用」に計上しております。

特定取引資産及び特定取引負債の評価は、有価証券及び金銭債権等については連結決算日の時価により、スワップ・先物・オプション取引等の派生商品については連結決算日において決済したものとみなした額により行っております。

また、特定取引収益及び特定取引費用の損益計上は、当連結会計年度中の受払利息等に、有価証券及び金銭債権等については前連結会計年度末と当連結会計年度末における評価損益の増減額を、派生商品については前連結会計年度末と当連結会計年度末におけるみなし決済からの損益相当額の増減額を加えております。

なお、派生商品については、特定の市場リスク又は特定の信用リスクに関して金融資産及び金融負債を相殺した後の正味の資産又は負債を基礎として、当該金融資産及び金融負債のグループを単位とした時価を算定しております。

(2) 有価証券の評価基準及び評価方法

① 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、持分法非適用の非連結子会社株式及び関連会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、ただし市場価格のない株式等については移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

② 金銭の信託において信託財産を構成している有価証券の評価は、上記(1)と同じ方法により行っております。

(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引（特定取引目的の取引を除く）の評価は、時価法により行っております。

なお、特定の市場リスク又は特定の信用リスクに関して金融資産及び金融負債を相殺した後の正味の資産又は負債を基礎として、当該金融資産及び金融負債のグループを単位とした時価を算定しております。

(4) 固定資産の減価償却の方法

① 有形固定資産

当行の有形固定資産は、定率法を採用しております。また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 3年～50年  
その他 3年～20年

連結子会社の有形固定資産については、資産の見積耐用年数に基づき、主として定率法により償却しております。

② 無形固定資産

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間（5年）に基づいて償却しております。

(5) 貸倒引当金の計上基準

当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、以下に定める債務者区分に応じて、次のとおり計上しております。

- ・破綻先：破産、会社更生、手形交換所における取引停止処分等、法的・形式的な経営破綻の事実が発生している債務者
- ・実質破綻先：実質的に経営破綻に陥っている債務者
- ・破綻懸念先：現状経営破綻の状況にはないが、今後経営破綻に陥る可能性が高い債務者
- ・要管理先：要注意先のうち債権の全部または一部が要管理債権（貸出条件緩和債権及び三月以上延滞債権）である債務者
- ・要注意先：貸出条件や返済履行状況に問題があり、業況が低調又は不安定で、今後の管理に注意を要する債務者
- ・正常先：業況が良好であり、かつ財務内容にも特段の問題がないと認められる債務者

① 破綻先及び実質破綻先に対する債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。

② 破綻懸念先に対する債権については、債権額から担保処分可能見込額及び保証による回収見込額を控除した残額（以下「非保全額」という）のうち、必要と認める額を以下のとおり計上しております。

ア 与信額が一定額以上の大口債務者に対する債権については、債務者の状況を総合的に判断してキャッシュ・フローによる回収可能額を見積り、非保全額から当該キャッシュ・フローを控除した残額を貸倒引当金とする方法（キャッシュ・フロー控除法）により計上しております。

イ 上記ア以外の債務者に対する債権については、過去の一定期間における倒産確率等から算出した予想損失率を非保全額に乘じた額を貸倒引当金として計上しております。

③ 要管理先及び要注意先のうち、与信額が一定額以上の大口債務者に対する債権については、債権の元本の回収及び利息の受取りに係るキャッシュ・フローを合理的に見積り、当該キャッシュ・フローを当初の約定利率で割り出した金額と債権の帳簿価額との差額を貸倒引当金とする方法（キャッシュ・フロー見積法）により計上しております。

④ 上記③以外の要管理先及び要注意先と正常先に対する債権については、過去の一定期間における倒産確率等から算出した予想損失率により貸倒引当金を計上しております。

(注) 1 倒産確率の算出におけるグループニング

倒産確率の算出は、正常先1区分、要注意先3区分（要注意先上位、要注意先下位、要管理先）、破綻懸念先2区分の計6区分で行っております。

※要注意先は、債務者の信用力の総合的な判断、貸出条件緩和債権等の有無により区分しております。

2 今後の予想損失額を見込む一定期間

正常先については今後1年間、要注意先及び要管理先については債権の平均残存期間に対応する期間、破綻懸念先については今後3年間の予想損失額を見込み、貸倒引当金を計上しております。（平均残存期間は、要注意先上位39ヶ月、要注意先下位43ヶ月、要管理先46ヶ月）

3 将来見込み等による倒産確率の補正及び決定方法

倒産確率は、直近3算定期間の平均値と景気循環サイクルを勘案した長期平均値を比較のうえ決定しております。なお、直近3算定期間の平均値は、足元の状況及び将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

全ての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、営業関連部署から独立した資産査定部署が査定結果を決定するとともに、監査部署が査定結果を監査しております。

連結子会社の貸倒引当金については、当行の償却・引当基準に準じて必要と認められた額を計上しております。

(6) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準

睡眠預金払戻損失引当金は、一定の要件を満たし負債計上を中止するとともに利益計上を行った預金の預金者の払戻請求による支払いに備えるため、過去の払戻実績率等に基づく将来の払戻見込額を計上しております。

(7) 偶発損失引当金の計上基準

偶発損失引当金は、信用保証協会の責任共有制度における負担金について、代位弁済の実績に基づき将来の負担金支払見込額を計上しております。なお、代位弁済の実績率の算定期間は、貸倒引当金の予想損失率の算定期間と同一としております。

(8) 特別法上の引当金の計上基準

特別法上の引当金は、金融商品取引法第46条の5に定める金融商品取引責任準備金であり、有価証券又はデリバティブ取引の事故による損失に備えるため、連結子会社が金融商品取引業等に関する内閣府令第175条の規定に定めるところにより算出した額を計上しております。

(9) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

数理計算上の差異

各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（主として10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生した翌連結会計年度から損益処理

なお、一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職一時金制度については、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とし、企業年金制度については、直近の数理債務をもって退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(10) 重要な収益及び費用の計上基準

「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 2020年3月31日）等を適用しており、約束した財またはサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財またはサービスと交換を受け取ると思込まれる金額で収益を認識しております。

(11) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

当行の外貨建資産・負債及び海外支店勘定は、主として連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。

(12) リース取引の収益・費用の計上基準

ファイナンス・リース取引に係る収益・費用の計上基準については、リース契約期間の経過に応じて計上する方法によっております。

(13) 重要なヘッジ会計の方法

① 金利リスク・ヘッジ

当行の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 2022年3月17日）。以下、「業種別委員会実務指針第24号」という。）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の期間毎にグループニングのうえ特定評価しております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。



② 為替変動リスク・ヘッジ

当行の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第25号 2020年10月8日。以下、「業種別委員会実務指針第25号」という。）に規定する繰延ヘッジによっております。

繰延ヘッジの採用にあたっては、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う為替スワップ取引等をヘッジ手段として指定し、当該ヘッジ手段の残存期間を通じて、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認しております。

また、外貨建有価証券（債券以外）の為替変動リスクをヘッジするため、事前にヘッジ対象となる外貨建有価証券の銘柄を特定し、当該外貨建有価証券について外貨ベースで取得原価以上の直先負債が存在していること等を条件に包括ヘッジとして繰延ヘッジ及び時価ヘッジを適用しております。

③ 連結会社間取引等

デリバティブ取引のうち連結会社間及び特定取引動とそれ以外の動との間の内部取引については、ヘッジ手段として指定している金利スワップ取引及び通貨スワップ取引等に対して、業種別委員会実務指針第24号及び同第25号に基づき、恣意性を排除し厳格なヘッジ運営が可能と認められる対外カパー取引の基準に準拠した運営を行っているため、当該金利スワップ取引及び通貨スワップ取引等から生じる収益及び費用は消去せずに損益認識又は繰延処理を行っております。

なお、一部の資産・負債については、繰延ヘッジ、金利スワップの特例処理を行っております。

(4) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。

(重要な会計上の見張り)

貸倒引当金

- 当連結会計年度に係る連結財務諸表に計上した金額  
貸倒引当金41,129百万円  
うちキャッシュ・フロー控除法による貸倒引当金12,698百万円  
うちキャッシュ・フロー見積法による貸倒引当金3,078百万円
- 識別した項目に係る重要な会計上の見掛りの内容に関する理解に資する情報  
(1) 算出方法  
貸倒引当金は、「(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項) 4. 会計方針に関する事項 (5) 貸倒引当金の計上基準」に記載のとおり、予め定められている償却・引当基準に則り、債務者区分に応じて算定しております。

(2) 主要な仮定

- 債務者区分の判定やキャッシュ・フロー控除法及びキャッシュ・フロー見積法における将来キャッシュ・フローの見積りに利用した事業計画  
債務者区分の判定やキャッシュ・フロー控除法及びキャッシュ・フロー見積法における将来キャッシュ・フローの見積りに利用した事業計画における販売予測、経費予測及び債務返済計画等の将来見込みにおいて、主として以下の仮定を置いております。  
・債務者の属する業種・業界等における新型コロナウイルス感染症による業績に影響を及ぼす期間  
・債務者の属する業種・業界等における市場の成長性や市場価格動向
- 新型コロナウイルス感染症の影響  
新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う経済への影響は当面継続すると想定しております。当該想定のもと、主に貸出金等の信用リスクに一定の影響を及ぼし、一部の債務者の信用力（返済能力等）が低下するものの、与信費用の増加は多額にならないものと仮定しております。  
こうした仮定のもと、足元の業績や将来の業績見通しを踏まえ、一部の債務者の債務者区分を見直すとともに、キャッシュ・フロー見積法やキャッシュ・フロー控除法におけるキャッシュ・フローによる回収可能額の見積りにもこれらの実態を反映して貸倒引当金を算定しております。  
当該仮定は不確実であり、新型コロナウイルス感染症の状況やその経済への影響が変化した場合には、今後の業績に影響を及ぼす可能性があります。
- 翌連結会計年度に係る連結財務諸表に及ぼす影響  
新型コロナウイルス感染症の状況を含む債務者の経営環境等の変化により、当連結会計年度末の見積りに用いた仮定が変化した場合は、債務者区分やキャッシュ・フロー控除法及びキャッシュ・フロー見積法における将来キャッシュ・フローの見積り額の変更等により、翌連結会計年度の連結財務諸表に計上する貸倒引当金に重要な影響を及ぼす可能性があります。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下、「収益認識会計基準」という。）等を当連結会計年度の期首から適用しております。

これに伴い、当行及び一部子会社が対価の受領時点で認識しておりました収益をサービス提供時に収益認識することいたしました。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従い、当連結会計年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当連結会計年度の期首の利益剰余金に加減し、当該期首直前から新たな会計方針を適用しております。

この結果、当連結会計年度の期首の利益剰余金が68百万円減少しております。また、当連結会計年度の税金等調整前当期純利益に対する影響額は軽微であります。

(時価算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」（企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下、「時価算定会計基準」という。）等を当連結会計年度の期首から適用しております。

これに伴いデリバティブ取引の評価について、相手先の信用リスクや自己の信用リスク等を時価に反映することとしており、時価算定会計基準第20項ただし書きに定める経過的な取扱いに従い、当連結会計年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当連結会計年度の期首の利益剰余金に加減しております。この結果、当連結会計年度の期首の特定取引資産が21百万円減少、その他資産が139百万円減少、特定取引負債が12百万円増加、その他負債が129百万円増加、繰延税金負債が91百万円減少、利益剰余金が211百万円減少しております。また、当連結会計年度の税金等調整前当期純利益に対する影響額は軽微であります。

上記のほか、「金融商品関係」注記において、金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項等の注記を行うことといたしました。

(未適用の会計基準等)

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 2021年6月17日 企業会計基準委員会）

(1) 概要

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準委員会 企業会計基準適用指針第31号）の2021年6月17日の改正は、2019年7月4日の公表時において、「投資信託の時価の算定」に関する検討には、関係者との協議等に一定の期間が必要と考えられるため、また、「貸借対照表に持分相当額を純額で計上する組合等への出資」の時価の注記についても、一定の検討を要するため、「時価の算定に関する会計基準」公表後、概ね1年をかけて検討を行うこととされたものが、改正され、公表されたものです。

(2) 適用予定日

2023年3月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

(表示方法の変更)

従来、当行が契約する団体信用生命保険等の受取配当金につきましては、その他の経常収益に計上してはいたしましたが、一部の団体信用生命保険の支払保険料と受取配当金に係る契約の変更が生じたこと、並びに当該保険契約の増加が見込まれることを契機に計上方法の見直しを検討いたしました。検討の結果、支払保険料から受取配当金を控除した額を費用として計上することが本来負担すべき保険料を表示するという観点からより適切であると判断し、当連結会計年度より債務取引等費用に計上しております。この表示方法の変更を反映させるため前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。この結果、前連結会計年度の連結損益計算書に表示してありましたその他の経常収益10,887百万円及び債務取引等費用7,329百万円は、その他の経常収益9,522百万円及び債務取引等費用5,964百万円と表示しております。

(連結貸借対照表関係)

- 非連結子会社及び関連会社の株式又は出資金の総額  
株式 3百万円  
出資金 1,183百万円
- 無担保の消費貸借契約（債券貸借取引）により貸し付けている有価証券が、「有価証券」中の国債に含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。  
193,771百万円
- 銀行法及び金融機能の再生のための緊急措置に関する法律に基づく債権は次のとおりであります。なお、債権は、連結貸借対照表の「有価証券」中の社債（その元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が有価証券の私券（金融商品取引法第2条第3項）によるものに限り）、貸出金、外国為替、「その他資産」中の未収利息及び仮払金並びに支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに注記されている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券（使用貸借又は貸借契約によるものに限り。）であります。  
破産更生債権及びこれらに準ずる債権額 7,386百万円  
危険債権額 77,879百万円  
三月以上延滞債権額 1,725百万円  
貸出条件緩和債権額 20,466百万円  
合計額 107,457百万円  
破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権であります。  
危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性が高い債権で破産更生債権及びこれらに準ずる債権に該当しないものであります。  
三月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から三月以上遅延している貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権並びに危険債権に該当しないものであります。  
貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に対し有利となる取決めの行った貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権並びに三月以上延滞債権に該当しないものであります。  
なお、上記債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

(表示方法の変更)

「銀行法施行規則等の一部を改正する内閣府令」（2020年1月24日 内閣府令第3号）が2022年3月31日から施行されたことに伴い、銀行法の「リスク管理債権」の区分等を、金融機能の再生のための緊急措置に関する法律に基づく開示債権の区分等に合わせて表示しております。

- 手形割引は、業種別委員会実務指針第24号に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替等は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。  
16,831百万円
- 担保に供している資産は次のとおりであります。  
担保に供している資産  
特定取引資産 5,999百万円  
有価証券 1,298,835百万円  
貸出金 1,652,965百万円  
現金（その他資産） 408百万円  
計 2,958,208百万円  
担保資産に対応する債務  
預金 66,030百万円  
債券貸借取引受入担保金 322,484百万円  
借入金（借入金） 2,073,288百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用等として、次のものを差し入れております。  
有価証券 1,194百万円  
現金（その他資産） 25百万円  
金融商品等差入担保金（その他資産） 13,538百万円  
中央清算機関差入証拠金（その他資産） 56,733百万円

また、その他資産には先物取引差入証拠金及び保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。  
先物取引差入証拠金 60百万円  
保証金 651百万円

- 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。  
融資未実行残高 1,664,934百万円  
うち原契約期間が1年以内のもの 1,470,567百万円  
なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴するほか、契約後も定期的に予め定められている行内（社内）手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

7. 有形固定資産の減価償却累計額	
減価償却累計額	72,937百万円
8. 有形固定資産の圧縮記帳額	
圧縮記帳額	7,788百万円
(当該連結会計年度の圧縮記帳額)	( 一百万円)
9. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額	53,313百万円
10. 元本補填契約のある信託の元本金額は、次のとおりであります。	
金銭信託	360百万円

(連結損益計算書関係)

1. 営業経費には、次のものを含んでおります。	
給料・手当	23,505百万円
2. その他の経常費用には、次のものを含んでおります。	
金銭の信託運用損	3,717百万円
株式等売却損	2,419百万円

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額	
その他有価証券評価差額金	
当期発生額	△42,961百万円
組替調整額	6,212百万円
税効果調整前	△36,748百万円
税効果額	11,086百万円
その他有価証券評価差額金	△25,662百万円
繰延ヘッジ損益	
当期発生額	18,416百万円
組替調整額	△2,273百万円
税効果調整前	16,143百万円
税効果額	△4,899百万円
繰延ヘッジ損益	11,243百万円
退職給付に係る調整額	
当期発生額	△705百万円
組替調整額	△2,657百万円
税効果調整前	△3,362百万円
税効果額	1,027百万円
退職給付に係る調整額	△2,334百万円
その他の包括利益合計	△16,752百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位:千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	511,103	—	—	511,103	
自己株式					
普通株式	21,544	0	100	21,445	(注)

(注) 自己株式の増加は単元未満株式の買取請求による0千株であります。自己株式の減少は新株予約権の行使による99千株及び単元未満株式の買増請求による0千株であります。

2. 新株予約権に関する事項

区分	新株予約権 の内訳	新株予約権の 目的となる株式 の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)			当連結会計年度末 残高 (百万円)	摘要
			当連結会計 年度期首	当連結会計年度 増加	当連結会計年度 減少		
当	ストック・オプションとしての新株予約権		—	—	—	271	
合	計		—	—	—	271	

3. 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2021年6月25日 定時株主総会	普通株式	3,916	8.00	2021年3月31日	2021年6月28日
2021年10月29日 取締役会	普通株式	2,937	6.00	2021年9月30日	2021年12月3日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の 原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年6月24日 定時株主総会	普通株式	4,896	利益 剰余金	10.00	2022年3月31日	2022年6月27日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

現金預け金勘定	4,049,642百万円
預け金(日銀預け金を除く)	△24,559百万円
現金及び現金同等物	4,025,083百万円

(リース取引関係)

1. ファイナンス・リース取引(貸手側)

(1) リース投資資産の内訳	
リース料債権部分	57,007百万円
見積残存価額部分	7,397百万円
維持管理費用相当額	△1,496百万円
受取利息相当額	△3,781百万円
リース投資資産	59,127百万円

(2) リース債権及びリース投資資産に係るリース料債権部分の連結決算日後の回収予定額

	リース債権(百万円)	リース投資資産(百万円)
1年以内	2,583	17,704
1年超2年以内	2,184	14,138
2年超3年以内	1,713	10,494
3年超4年以内	1,187	7,126
4年超5年以内	492	3,752
5年超	851	3,790

2. オペレーティング・リース取引(貸手側)

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

1年内	3,271百万円
1年超	4,010百万円
合計	7,282百万円

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、ローン事業及び投資商品の販売などの金融サービス事業を行っております。これらの事業を行うため、市場の状況や長期・短期のバランスを調整して、預金及び短期金融市場により資金調達を行っております。

このように、主として金利変動を伴う金融資産及び金融負債を有しているため、金利変動による不利な影響が生じないよう、当行では、資産及び負債の総合的管理(以下「ALM」という。)をしており、その一環として、デリバティブ取引も行っております。

また、当行及び一部の連結子会社では、顧客販売に対応するため有価証券を売買目的で保有しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

① 貸出金

主として国内のお取引先に対する貸出金であり、お取引先の契約不履行によってもたらされる信用リスクに晒されております。貸出金は、ある特定の企業集団には集中してはおりませんが、営業の基盤である長野県内のお取引先に対する比率は約5割であり、長野県の経済環境の変化により信用リスクが増加する可能性があります。

② 有価証券

主に債券、株式、投資信託及び組合出資金であり、満期保有目的及びその他目的で保有しているほか、顧客販売に対応するため、一部の債券は売買目的で保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク及び金利の変動リスク、市場価格の変動リスク、為替リスク、流動性リスクに晒されております。

③ 預金

お取引先から預かる預金であり、金利リスク、為替リスク、流動性リスクに晒されております。

④ デリバティブ

デリバティブ取引の利用目的は、お取引先への各種リスク・ヘッジ手段の提供、当行グループのALMにおけるヘッジ目的及び当行の収益増強のためであります。

デリバティブ取引には金利スワップ取引、金利キャップ取引及び通貨スワップ取引などがあります。当行では、これらをヘッジ手段として、ヘッジ対象である貸出金及び有価証券に関する金利・為替の変動リスク等に対してヘッジ会計を適用しており、これらのヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象とヘッジ手段の有効性を評価しております。

なお、ヘッジ目的のために取組むデリバティブ取引は、半期または年度毎に定めるヘッジ方針に基づき実施しております。

当行グループが利用しているデリバティブ取引は、市場リスク及び信用リスクに晒されております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスクの管理

当行グループは、信用リスク管理に係る規程類に従い、個別案件毎の審査、与信限度額による管理、問題債権への対応、定期的な債務者区分及び債務者格付の付与、貸出金ポートフォリオの管理などを実施しております。審査体制については、本部においては営業推進部門と審査部門を分離して各々の独立性を確保しながら相互を牽制する体制としており、営業店においては申込受付から最終決定までの間に多段階のチェックが行われる体制としております。その他の管理体制については、定期的に債務者区分及び債務者格付の見直しを実施し、問題債権の早期把握に努めるとともに、これらの結果を信用リスクの計量化・ポートフォリオ管理などに活用しております。

有価証券の発行体の信用リスクは、リスク統括部において、半期毎に与信先・取引種目毎に与信枠を設定し、その枠の中で取引を行う体制としております。

② 市場リスクの管理

当行グループは、市場リスク管理に係る規程類を定め、経営の健全性及び収益性を確保するため市場リスクをコントロールしております。

ア 金利リスク・為替リスク・価格変動リスク

当行では、リスクとリターンを適切に保ち、リスクテイクを適正規模に調整するため、市場環境・経営体力等を勘案し、半期毎に取締役会で市場リスク管理方針を定めております。市場リスク管理方針では取引種類別にリスク限度額、損失限度額、投資限度額、これらの限度額に対するアラームポイント等を定め、全体の市場リスク量や損失額を一定の範囲に抑える管理運営を行っております。各取引担当部署は定められた限度の範囲で業務遂行するほか、リスクの状況を毎日担当役員に報告し、迅速で適切な対応を実践しております。

一方、業務管理面では、取引を執行する部署(フロントオフィス)と当該取引にかかる事務処理部署(バックオフィス)を明確に分離し、さらにリスクを統制・管理する部署(ミドルオフィス)を設置し、相互に牽制する体制となっております。

(ア) 金利リスクの管理

金利変動による経済価値増減はバリュエーション・アット・リスク(以下「VaR」という。)により、ギャップ分析等による金利の変動リスクはALMにより管理しており、「ALM・統合リスク管理会議」において実施状況を把握・確認し、対応等を協議しております。なお、ALMにより金利の変動リスクをヘッジするための金利スワップ及び金利キャップ等のデリバティブ取引を行っております。

(イ) 為替リスクの管理

為替変動による経済価値増減はVaRにより管理しております。また、過度な為替リスクを回避するため、市場リスク管理方針に取組額の上限を定めております。

(ウ) 価格変動リスクの管理

当行では、価格変動による経済価値増減はVaRにより計測し管理しております。なお、取締役会において、自己資本や市場環境等を勘案して年度毎のVaRによるリスク限度額を決定し、その限度額を遵守しております。一部の連結子会社では、保有する有価証券の時価を取締役会等へ定期的に報告しリスクを管理しております。



イ デリバティブ取引

当行では、デリバティブ取引を管理する規程類を制定して、連結子会社の行うデリバティブ取引を含め、一体的にリスクを管理しております。また、デリバティブ全体のポジション額、時価評価額、市場リスク量等は担当役員及び「ALM・統合リスク管理会議」等へ定期的に報告しリスクを管理しております。

デリバティブ取引のリスク管理は、リスクを統制・管理する部署（ミドルオフィス）が取引を執行する部署（フロントオフィス）から独立して実施し、牽制が働く体制を構築しております。

ウ 市場リスクに係る定量的情報

当行では、リスク管理上、原則全ての金融商品について市場リスクに関する定量的分析を行っており、主としてVaRを利用し、算定したVaRに一定のストレス（1～1.45倍）を掛けた市場リスク量を管理しております。VaRの算定にあたってはヒストリカル・シミュレーション法（信頼区間：99.9%、観測期間：1,250日）を採用しております。保有期間については、商品のポジション解消期間などを考慮して適切な期間を設定しており、トレーディング目的の金融商品は10日、トレーディング目的以外の金融商品（バンキング業務に係る金融商品）のうち政策投資目的の商品は240日、それ以外の商品は主に120日としております。

2022年3月31日（当連結会計年度末日）現在、当行のトレーディング目的の市場リスク量（損失額の推計値）は、総額で849百万円、トレーディング目的以外の市場リスク量（損失額の推計値）は、総額で427,286百万円です。なお、市場リスク量の総額は部門別各市場リスク量を単純合算した合計であり、市場リスクに係るリスク変数間の相関は考慮していません。

VaRの算定にあたって、預貸金の金利リスクについては、流動性預金のうち、引き出されることなく長期間滞留する預金をコア預金として、内部モデルにより最長10年の満期に振り分け、金利リスクを認識しております。また、非上場株式など市場価格のない金融商品についても、各資産のインデックスの変動を用いて価格変動リスクを認識しております。

当行では、モデルが算出するVaRと仮想損益（リスク量計測時点のポートフォリオを固定した場合に保有期間後に発生したと想定される損益）を比較するバックテストを実行しております。実施したバックテストの結果、使用する計測モデルは十分な精度により市場リスクを捕捉しているものと考えております。ただし、VaRは過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率での市場リスク量を計測しており、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下におけるリスクは捕捉できない場合があります。

③ 流動性リスクの管理

当行グループは、ALMを通じて資金調達手段の多様化、市場環境を考慮した長期・短期の調達バランスの調整などによって、流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等による場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は次のとおりであります。なお、市場価格のない株式等及び組合出資金は次表には含めておりません（注1）参照。また、現金預け金、コールローン及び買入手形、外国為替（資産・負債）、コールマネー及び売渡手形、売現先勘定、債券貸借取引受入担保金は主に短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、注記を省略しております。

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	時 価	差 額
(1) 有価証券			
満期保有目的の債券	99	101	1
その他有価証券	2,766,219	2,766,219	—
(2) 貸出金	5,931,315		
貸倒引当金 (*1)	△34,564		
	5,896,751	5,922,770	26,018
資産計	8,663,071	8,689,090	26,019
(1) 預金	8,049,875	8,049,968	93
(2) 譲渡性預金	132,507	132,507	0
(3) 借入金	2,087,634	2,086,200	△1,434
負債計	10,270,016	10,268,675	△1,341
デリバティブ取引 (*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	△686	△686	—
ヘッジ会計が適用されているもの (*3)	22,399	22,399	—
デリバティブ取引計	21,713	21,713	—

(\*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金（17,034百万円）及び個別貸倒引当金（17,530百万円）を控除しております。

(\*2) 特定取引資産・負債及びその他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については△で表示しております。

(\*3) ヘッジ対象である有価証券、貸出金、預金の相場変動を相殺するためにヘッジ手段として指定した金利スワップ等であり、繰延ヘッジ及び特例処理を適用しております。なお、これらのヘッジ関係に「LIBORを参照する金融商品に関するヘッジ会計の取扱い」（実務対応報告第40号 2022年3月17日）を適用しております。

(注1) 市場価格のない株式等及び組合出資金の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「その他有価証券」には含めておりません。

(単位：百万円)

区 分	2022年3月31日
非上場株式 (*1)	6,782
組合出資金 (*2)	27,366

(\*1) 非上場株式については「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第19号 2020年3月31日）第5項に基づき、時価開示の対象とはしていません。

(\*2) 組合出資金については「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 2019年7月4日）第27項に基づき、時価開示の対象とはしていません。

(注2) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
有価証券 (*1)	211,176	307,916	272,576	174,140	226,620	805,186
満期保有目的の債券	—	100	—	—	—	—
うち国債	—	100	—	—	—	—
その他有価証券のうち	211,176	307,816	272,576	174,140	226,620	805,186
満期があるもの						
うち国債	44,500	21,500	—	10,000	137,000	589,500
地方債	8,670	86,833	90,387	97,304	9,632	11,976
社債	127,594	80,959	116,207	28,526	53,778	114,587
貸出金 (*2)	1,429,593	1,184,947	828,870	498,399	410,898	923,647
合 計	1,640,769	1,492,863	1,101,447	672,539	637,519	1,728,833

(\*1) 元本についての償還予定額を記載しており、連結貸借対照表計上額とは一致しません。

(\*2) 貸出金のうち、期間の定めのないもの654,959百万円は含めておりません。

(注3) 借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金 (*)	7,231,102	773,734	28,741	3,961	6,320	6,014
譲渡性預金	132,507	—	—	—	—	—
借入金	1,378,737	706,133	300	13	2,449	—
合 計	8,742,347	1,479,867	29,042	3,975	8,770	6,014

(\*）預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用し算定した時価  
時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

(単位：百万円)

区分	時 価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
有価証券				
その他有価証券 (*1)				
国債	806,882	13,671	—	820,553
地方債	—	308,214	—	308,214
社債	—	471,667	53,022	524,690
株式	492,725	60	—	492,786
その他	89,298	282,428	—	371,727
資産計	1,388,906	1,076,041	53,022	2,517,971
デリバティブ取引 (*2)				
金利関連取引	—	25,303	—	25,303
通貨関連取引	—	△3,667	—	△3,667
債券関連取引	77	—	—	77
デリバティブ取引計	77	21,636	—	21,713

(\*1) 「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」（2020年3月6日内閣府令第9号）附則第5条第6項の経過措置を適用した投資信託等については、上記表には含めておりません。連結貸借対照表における当該投資信託等の金額は248,248百万円です。

(\*2) 特定取引資産・負債及びその他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については△で表示しております。

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

(単位：百万円)

区分	時 価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
有価証券				
満期保有目的の債券				
国債	101	—	—	101
貸出金	—	—	5,922,770	5,922,770
資産計	101	—	5,922,770	5,922,871
預金	—	8,049,968	—	8,049,968
譲渡性預金	—	132,507	—	132,507
借入金	—	2,079,521	6,678	2,086,200
負債計	—	10,261,996	6,678	10,268,675

(注1) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

資産  
有価証券  
株式は取引所の価格によっており市場の活発性に基づき、時価は主にレベル1に分類して  
おります。債券は活発な市場のある国債は主にレベル1の時価に分類し、それ以外の市場  
価格等のある債券等はレベル2の時価に分類しております。

保証付私債は、内部格付及び期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を市場金利に  
内部格付等に応じたスプレッドを加味した利率で割り引いて時価を算定しており、割引率  
が観察不能であるため、レベル3の時価に分類しております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項は「〔有価証券関係〕」に記載しており  
ます。  
貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信  
用状態が実行後大きく異ならない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当  
該帳簿価額の時価としております。固定金利によるもので事業性貸出金は、貸出金の種類、  
内部格付及び期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を市場金利に内部格付等に応じた  
スプレッドを加味した利率で割り引いて時価を算定しております。固定金利によるもので  
非事業性貸出金は、商品別、期間ごとに元利金の合計額を同様の新規貸出を行った場合に  
想定される適用利率で割り引いて時価を算定しております。なお、約定期間が短期間（1  
年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額の時価として  
おります。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャ  
ッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算  
定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引  
当金計上額を控除した金額に近似していることから、当該価額の時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設け  
ていないものについては、返済見込期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額に近似して  
いるものと想定されるため、帳簿価額の時価としております。  
これらの取引はレベル3の時価に分類しております。

負債

預金、及び譲渡性預金  
要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額（帳簿価額）の時価とみ  
なしております。また、定期預金及び譲渡性預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、  
将来キャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規  
に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が短期間（1年  
以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額の時価としてお  
ります。

これらの取引はレベル2の時価に分類しております。

借入金

借入金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映し、また、当行及び連  
結子会社の信用状態は実行後大きく異ならないことから、時価は帳簿価額と近似して  
いると考えられるため、当該帳簿価額の時価としております。固定金利によるものは、一  
定の期間ごとに区分した当該借入金の元利金の合計額を同様の借入において想定される利  
率で割り引いて現在価値を算定しております。なお、約定期間が短期間（1年以内）の  
ものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額の時価としております。  
これらの取引は主にレベル2の時価に分類しております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものは  
レベル1の時価に分類しており、主に債券先物取引や金利先物取引がこれに含まれます。

ただし、大部分のデリバティブ取引は店頭取引であり、公表された相場価格が存在しない  
ため、取引の種類や満期までの期間に応じて現在価値技法やブラック・ショールズ・モデル  
等の評価技法を利用して時価を算定しております。これらの評価技法で用いている主なイン  
プットは、金利や為替レート、ボラティリティ等であります。また、取引相手の信用リスク  
及び当行自身の信用リスクに基づく価格調整を行っております。観察できないインプットを  
用いていない又はその影響が重要でない場合はレベル2の時価に分類しております。

(注2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品のうちレベル3の時価に関する情報

(1) 重要な観察できないインプットに関する定量的情報

区分	評価技法	重要な観察 できない インプット	インプット の範囲 (*)	インプットの 加重平均 (*)
有価証券 その他有価証券				
社債	割引現在 価値法	倒産確率 倒産時損失率	0.0%—8.1% 28.8%—99.7%	0.4% 74.6%

(\*) 破綻先・実質破綻先・破綻懸念先発行分はインプットの範囲及びインプットの加重平均から  
除外しております。

(2) 期首残高から期末残高への調整表、当期の損益に認識した評価損益

(単位：百万円)

		有価証券
		その他有価証券
		社債
期首残高		48,968
当期の損益又は その他の包括利益	損益に計上 (*1)	0
	その他の包括利益に計上 (*2)	△128
購入、売却及び決済額	購入	13,480
	売却	△9,297
	決済	—
レベル3の時価への振替		—
レベル3の時価からの振替		—
期末残高		53,022
当期の損益に計上した額のうち連結貸借対照表日において保有する 金融資産及び負債の評価損益 (*1)		△290

(\*1) 連結損益計算書の「その他業務収益」及び「その他業務費用」に含まれております。

(\*2) 連結包括利益計算書の「その他の包括利益」の「その他有価証券評価差額金」に含まれ  
ております。

(3) 時価の評価プロセスの説明

当行グループはリスク管理部門（市場ミドル部門）にて時価の算定に関する方針及び手  
続を定めており、これに沿って市場バック部門が時価を算定しております。算定された時  
価は市場バック部門内及びフロント部門にて、時価の算定に用いられた評価技法及びイン  
プットの妥当性並びに時価のレベル分類の適切性を検証しております。検証結果は毎期市  
場ミドル部門に報告され、時価の算定の方針及び手続に関する適正性が確保されてお  
ります。

時価の算定にあたっては、資産の性質及び特性を考慮した評価モデルを用いております。  
また、第三者から入手した相場価格を利用する場合においても、利用されている評価技法  
及びインプットの確認や類似の金融商品の時価との比較等の適切な方法により価格の妥当  
性を検証しております。

(4) 重要な観察できないインプットを変化させた場合の時価に対する影響に関する説明  
社債の時価の算定で用いている重要な観察できないインプットは、倒産確率、倒産時損  
失率であります。これらのインプットの著しい増加（減少）は、それら単独では、時価の  
著しい低下（上昇）を生じさせます。一般に、倒産確率に関して用いている仮定の変化は、  
倒産時損失率に関して用いている仮定の同方向への変化を伴います。

(有価証券関係)

※連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「買入金銭債権」中の信託受益権、「特定取引資産」  
中の商品有価証券及びその他の特定取引資産を含めて記載しております。

1. 売買目的有価証券

		2022年3月31日
連結会計年度の損益に含まれた評価差額		△2百万円

2. 満期保有目的の債券（2022年3月31日）

種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照表計上 額を超えるもの	国債	99	101
時価が連結貸借対照表計上 額を超えないもの	国債	—	—
合計	99	101	1

3. その他有価証券（2022年3月31日）

種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超える もの	株式	488,299	92,329
	債券	550,465	534,855
	国債	241,606	227,839
	地方債	169,747	168,938
	社債	139,110	138,078
	その他	279,538	259,557
	うち外国証券	159,251	154,259
	小計	1,318,302	886,743
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超え ないもの	株式	4,486	5,096
	債券	1,102,992	1,124,192
	国債	578,946	597,720
	地方債	138,466	138,658
	社債	385,579	387,813
	その他	403,601	426,869
	うち外国証券	271,648	286,501
	小計	1,511,081	1,556,157
合計	2,829,384	2,442,900	

4. 当連結会計年度中に売却したその他有価証券（自 2021年4月1日 至 2022年3月31  
日）

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	20,464	2,714	1,081
債券	534,450	1,089	3,679
国債	503,746	964	3,679
地方債	29,134	118	—
社債	1,569	6	—
その他	123,964	4,090	3,847
うち外国証券	98,482	2,769	3,697
合計	678,879	7,894	8,608

(金銭的信託関係)

1. 運用目的の金銭的信託（2022年3月31日）

運用目的の金銭的信託	連結貸借対照表計上額 (百万円)	連結会計年度の損益に含 まれた評価差額 (百万円)
運用目的の金銭的信託	79,448	△339

2. 満期保有目的の金銭的信託

該当ありません。

3. その他の金銭的信託（運用目的及び満期保有目的以外）

該当ありません。

(その他有価証券評価差額金)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであり  
ます。

		金額 (百万円)
評価差額		386,706
その他有価証券		386,706
その他の金銭的信託		—
(△) 繰延税金負債		116,632
その他有価証券評価差額金（持分相当額調整前）		270,074
(△) 非支配株主持分相当額		1,330
(+) 持分法適用会社が所有するその他有価証券 に係る評価差額金のうち親会社持分相当額		—
その他有価証券評価差額金		268,743



(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益は次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引 (2022年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)	
金融商品取引所	金利先物	売建	—	—	—	
		買建	—	—	—	
	金利オプション	売建	—	—	—	
		買建	—	—	—	
店頭	金利先渡契約	売建	—	—	—	
		買建	—	—	—	
	金利スワップ	受取固定・支払変動	129,643	84,250	240	240
		受取変動・支払固定	74,099	69,353	△731	△731
		受取変動・支払変動	10,000	—	4	4
	金利オプション	売建	—	—	—	—
		買建	—	—	—	—
その他	売建	—	—	—	—	
	買建	—	—	—	—	
合計		—	—	△486	△486	

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

(2) 通貨関連取引 (2022年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)	
金融商品取引所	通貨先物	売建	—	—	—	
		買建	—	—	—	
	通貨オプション	売建	—	—	—	
		買建	—	—	—	
店頭	通貨スワップ	売建	—	—	—	
		買建	—	—	—	
	為替予約	売建	64,490	3,299	△3,554	△3,554
		買建	67,805	2,834	3,374	3,374
	通貨オプション	売建	45,513	35,947	△1,075	1,192
		買建	45,513	35,947	1,056	△609
	為替スワップ	売建	—	—	—	—
買建		—	—	—	—	
その他	売建	—	—	—	—	
	買建	—	—	—	—	
合計		—	—	△199	402	

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

- (3) 株式関連取引  
該当ありません。
- (4) 債券関連取引  
該当ありません。
- (5) 商品関連取引  
該当ありません。
- (6) クレジット・デリバティブ取引  
該当ありません。
- (7) その他 (2022年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)	
店頭	地震デリバティブ	売建	2,935	—	△24	△24
		買建	2,935	—	24	24
合計		—	—	—	—	

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価は次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引 (2022年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)		
原則的処理方法	金利スワップ	受取固定・支払変動 受取変動・支払固定	—	—	—		
			946,362	918,762	25,864		
			145,880	—	△74		
	金利先物	売建	貸出金、その他の有価証券(債券)等の有利息の金融資産	—	—	—	
				—	—	—	
		金利オプション		売建	—	—	—
				買建	—	—	—
	その他	売建	—	—	—		
		買建	—	—	—		
	金利スワップの特例処理	金利スワップ	貸出金、預金	受取固定・支払変動	6,714	6,714	
受取変動・支払固定				14,276	14,150		
受取変動・支払変動				3,000	—		
合計				—	—	25,790	

- (注) 1. 主として業種別委員会実務指針第24号に基づき、繰延ヘッジによっております。
2. 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている貸出金、預金と一体として処理されており、その時価は「(金融商品関係)」の当該貸出金又は預金の時価に含めて記載しております。

(2) 通貨関連取引 (2022年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理方法	通貨スワップ	外貨建の貸出金、預金等	通貨スワップ	51,583	44,115
			為替予約	—	—
	為替スワップ		44,840	—	
	その他		—	—	
為替予約時の振当処理	通貨スワップ	—	通貨スワップ	—	—
			為替予約	—	—
ヘッジ対象に係る損益を認識する方法	通貨スワップ	外貨建の有価証券	通貨スワップ	9,793	9,793
			合計	—	—

(注) 主として業種別委員会実務指針第25号に基づき、繰延ヘッジによっております。

- (3) 株式関連取引  
該当ありません。
- (4) 債券関連取引 (2022年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理方法	債券先物	その他の有価証券(債券)	債券先物	15,047	—
			買建	—	—
	債券先物オプション		—	—	
	買建		—	—	
	債券店頭オプション		—	—	
	買建		—	—	
	その他		—	—	
合計	—	—	—	77	

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当行及び連結子会社は、従業員の退職給付に充てるため、積立型、非積立型の確定給付制度を採用しております。

確定給付企業年金制度(全て積立型制度である。)では、給与と勤務期間等に基づいた一時金又は年金を支給しております。また、確定給付企業年金制度にはキャッシュ・バランスプランを導入しております。当該制度では、加入者ごとに積立額及び年金額(原資に相当する仮想個人口座)を設け、主として市場金利の動向に基づく利息クレジットと、給与水準等に基づく拠出クレジットを累積しております。一部の確定給付企業年金制度には、退職給付信託が設定されております。

退職一時金制度では、退職給付として、給与と勤務期間等に基づいた一時金を支給しております。

なお、一部の連結子会社が有する確定給付企業年金制度及び退職一時金制度では、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

当行及び連結子会社は、複数事業主制度の確定給付企業年金基金制度に加入しております。自社の拠出に対応する年金資産の額を合理的に計算できることから当該事項に関する注記を含めて記載しております。

## 2. 確定給付制度

## (1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表 (注)に掲げられたものを除く

区分	金額 (百万円)
退職給付債務の期首残高	52,692
勤務費用	1,976
利息費用	125
数理計算上の差異の発生額	△658
退職給付の支払額	△3,030
その他	120
退職給付債務の期末残高	51,225

## (2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表 (注)に掲げられたものを除く

区分	金額 (百万円)
年金資産の期首残高	83,616
期待運用収益	1,274
数理計算上の差異の発生額	△1,363
事業主からの拠出額	750
退職給付の支払額	△1,933
その他	120
年金資産の期末残高	82,464

## (3) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

区分	金額 (百万円)
退職給付に係る負債の期首残高	452
退職給付費用	△289
退職給付の支払額	△73
退職給付に係る負債の期末残高	90

## (4) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

区分	金額 (百万円)
積立型制度の退職給付債務	43,400
年金資産	△86,203
	△42,802
非積立型制度の退職給付債務	11,653
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△31,149

退職給付に係る負債	11,653
退職給付に係る資産	△42,803
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△31,149

(注) 簡便法を適用した制度を含みます。

## (5) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

区分	金額 (百万円)
勤務費用	1,976
利息費用	125
期待運用収益	△1,274
数理計算上の差異の費用処理額	△2,657
簡便法で計算した退職給付費用	△289
その他	166
確定給付制度に係る退職給付費用	△1,952

## (6) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目 (税効果控除前) の内訳は次のとおりであります。

区分	金額 (百万円)
数理計算上の差異	△3,362
その他	—
合計	△3,362

## (7) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目 (税効果控除前) の内訳は次のとおりであります。

区分	金額 (百万円)
未認識数理計算上の差異	△17,569
その他	—
合計	△17,569

## (8) 年金資産に関する事項

① 年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

債券	16.34%
株式	56.72%
生保一般勘定	17.65%
現金及び預金	3.05%
その他	6.24%
合計	100.00%

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が44.73%含まれております。

## ② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

## (9) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

- ① 割引率 0.1%~0.4%
- ② 長期期待運用収益率 1.0%~2.0%
- ③ 予想昇給率 10.0%

(ストック・オプション等関係)

1. スtock・オプションにかかる費用計上額及び科目名  
営業経費 47百万円

## 2. スtock・オプションの内容、規模及びその変動状況

## (1) スtock・オプションの内容

	2011年 ストック・オプション	2012年 ストック・オプション	2013年 ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役8名	当行の取締役8名	当行の取締役7名
株式の種類別のストック・オプションの数 (注)	普通株式150,000株	普通株式150,000株	普通株式129,300株
付与日	2011年8月8日	2012年8月6日	2013年8月5日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない。	権利確定条件は定めていない。	権利確定条件は定めていない。
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない。	対象勤務期間は定めていない。	対象勤務期間は定めていない。
権利行使期間	2011年8月9日~2036年8月8日	2012年8月7日~2037年8月6日	2013年8月6日~2038年8月5日

	2014年 ストック・オプション	2015年 ストック・オプション	2016年 ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役8名	当行の取締役8名	当行の取締役8名
株式の種類別のストック・オプションの数 (注)	普通株式133,800株	普通株式78,900株	普通株式150,000株
付与日	2014年7月22日	2015年7月27日	2016年7月25日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない。	権利確定条件は定めていない。	権利確定条件は定めていない。
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない。	対象勤務期間は定めていない。	対象勤務期間は定めていない。
権利行使期間	2014年7月23日~2039年7月22日	2015年7月28日~2040年7月27日	2016年7月26日~2041年7月25日

	2017年 ストック・オプション	2018年 ストック・オプション	2019年 ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役7名	当行の取締役8名	当行の取締役8名
株式の種類別のストック・オプションの数 (注)	普通株式109,600株	普通株式150,000株	普通株式150,000株
付与日	2017年7月24日	2018年7月23日	2019年7月22日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない。	権利確定条件は定めていない。	権利確定条件は定めていない。
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない。	対象勤務期間は定めていない。	対象勤務期間は定めていない。
権利行使期間	2017年7月25日~2042年7月24日	2018年7月24日~2043年7月23日	2019年7月23日~2044年7月22日

	2020年 ストック・オプション	2021年 ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役7名	当行の取締役7名
株式の種類別のストック・オプションの数 (注)	普通株式150,000株	普通株式130,700株
付与日	2020年7月20日	2021年7月19日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない。	権利確定条件は定めていない。
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない。	対象勤務期間は定めていない。
権利行使期間	2020年7月21日~2045年7月20日	2021年7月20日~2046年7月19日

(注) 株式数に換算して記載しております。

## (2) スtock・オプションの規模及びその変動状況

当連結会計年度 (2022年3月期) において存在したストック・オプションを対象とし、ストック・オプションの数については、株式数に換算して記載しております。

## ① スtock・オプションの数

	2011年 ストック・オプション	2012年 ストック・オプション	2013年 ストック・オプション	2014年 ストック・オプション	2015年 ストック・オプション	2016年 ストック・オプション
権利確定前 (株)						
前連結会計年度末	15,200	15,200	28,800	26,900	23,500	44,600
付与	—	—	—	—	—	—
失効	—	—	—	—	—	—
権利確定	—	—	—	—	—	—
未確定残	15,200	15,200	28,800	26,900	23,500	44,600
権利確定後 (株)						
前連結会計年度末	—	—	—	—	—	—
権利確定	—	—	—	—	—	—
権利行使	—	—	—	—	—	—
失効	—	—	—	—	—	—
未行使残	—	—	—	—	—	—

	2017年 ストック・オプション	2018年 ストック・オプション	2019年 ストック・オプション	2020年 ストック・オプション	2021年 ストック・オプション
権利確定前 (株)					
前連結会計年度末	65,600	95,600	126,900	150,000	—
付与	—	—	—	—	130,700
失効	—	—	—	—	—
権利確定	23,600	29,200	29,600	17,500	—
未確定残	42,000	66,400	97,300	132,500	130,700
権利確定後 (株)					
前連結会計年度末	—	—	—	—	—
権利確定	23,600	29,200	29,600	17,500	—
権利行使	23,600	29,200	29,600	17,500	—
失効	—	—	—	—	—
未行使残	—	—	—	—	—

## ② 単価情報

	2011年 ストック・オプション	2012年 ストック・オプション	2013年 ストック・オプション	2014年 ストック・オプション	2015年 ストック・オプション	2016年 ストック・オプション
権利行使価格 (円)	1	1	1	1	1	1
行使時平均株価 (円)	—	—	—	—	—	—
付与日における公正な評価単価 (円)	374	410	602	628	927	455

	2017年 ストック・オプション	2018年 ストック・オプション	2019年 ストック・オプション	2020年 ストック・オプション	2021年 ストック・オプション
権利行使価格 (円)	1	1	1	1	1
行使時平均株価 (円)	369	369	369	369	—
付与日における公正な評価単価 (円)	689	443	413	391	336

## 3. ストック・オプションの公正な評価単価の見積方法

当連結会計年度において付与された2021年ストック・オプションについての公正な評価単価の見積方法は以下のとおりであります。

- (1) 使用した評価技法 ブラック・ショールズ式  
(2) 主な基礎数値及び見積方法

	2021年ストック・オプション
株価変動性 (注) 1	25.12%
予想残存期間 (注) 2	1年1ヶ月
予想配当 (注) 3	14円/株
無リスク利率 (注) 4	△0.121%

- (注) 1. 予想残存期間 1年1ヶ月に対応する期間 (2020年6月から2021年7月まで) の株価実績に基づき算定しております。  
2. 過去の役員平均的な在任期間から、現在の在任役員平均在任期間を減じた期間を予想残存期間とする方法で見積もっております。  
3. 2021年3月期の配当実績  
4. 予想残存期間に対応する国債の利回り

## 4. ストック・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積りは困難であるため、実績の失効数のみ反映させる方法を採用しております。

## (税効果会計関係)

## 1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生主な原因別の内訳

繰延税金資産	
その他有価証券評価差額金	13,680百万円
貸倒引当金	11,561
減価償却費	2,902
繰延ヘッジ損益	2,099
減損損失	1,540
有価証券償却	1,190
未払事業税	295
退職給付に係る負債	114
その他	2,487
繰延税金資産小計	35,872
評価性引当額	△3,012
繰延税金資産合計	32,859
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	△130,312
繰延ヘッジ損益	△8,928
退職給付に係る資産	△4,354
退職給付信託設定益	△1,665
その他	△1,186
繰延税金負債合計	△146,447
繰延税金負債の純額	△113,587百万円

## 連結金融再生法開示債権及びリース管理債権

(単位: 百万円)

	2021年3月期	2022年3月期
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	11,791	7,386
危険債権	64,138	77,879
要管理債権	25,452	22,192
三月以上延滞債権	316	1,725
貸出条件緩和債権	25,136	20,466
小計	101,382	107,457
正常債権	5,531,420	5,922,836
総与信残高	5,632,803	6,030,294

2. 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳  
法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が、法定実効税率の百分の五以下であるため、記載を省略しております。

## (収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を分解した情報は、「セグメント情報」に記載のとおりであります。

## (関連当事者情報)

関連当事者との取引について記載すべき重要なものではありません。

## (1株当たり情報)

	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
1株当たり純資産額	1,856円25銭
1株当たり当期純利益	54円46銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	54円39銭

(注) 1. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

	当連結会計年度 (2022年3月31日)
純資産の部の合計額	912,698百万円
純資産の部の合計額から控除する金額	3,770百万円
うち新株予約権	271百万円
うち非支配株主持分	3,499百万円
普通株式に係る期末の純資産額	908,927百万円
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数	489,657千株

2. 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
1株当たり当期純利益	
親会社株主に帰属する当期純利益	26,667百万円
普通株主に帰属しない金額	—百万円
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益	26,667百万円
普通株式の期中平均株式数	489,634千株
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	
親会社株主に帰属する当期純利益調整額	—百万円
普通株式増加数	616千株
うち新株予約権	616千株
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要	—

## (重要な後発事象)

## (自己株式の取得)

当行は、2022年4月28日開催の取締役会において、会社法第165条第3項の規定により読み替えて適用される同法第156条の規定に基づき、自己株式取得に係る事項を決議いたしました。

1. 自己株式の取得を行う理由  
経営環境の変化に対応した資本政策の遂行及び株主の皆さまへの利益還元を図るため行なうものです。  
2. 取得に係る事項の内容  
(1) 取得する株式の種類: 普通株式  
(2) 取得する株式の総数: 20,000,000株 (上限)  
(3) 株式取得価額の総額: 10,000百万円 (上限)  
(4) 自己株式取得の期間: 2022年5月2日から2023年3月31日まで

## (自己株式の消却)

当行は、2022年4月28日開催の取締役会において、会社法第178条の規定に基づき、自己株式の消却を決議し、2022年5月20日に自己株式20,000,000株を消却いたしました。

1. 自己株式消却の理由  
経営環境の変化に対応した資本政策の遂行及び株主の皆さまへの利益還元を図るため行なうものです。  
2. 消却に係る事項の内容  
(1) 消却した株式の種類: 普通株式  
(2) 消却した株式の総数: 20,000,000株  
(3) 消却実施日: 2022年5月20日  
(4) 消却後の発行済株式総数: 491,103,411株



## セグメント情報

### ●報告セグメントの概要

当行グループの報告セグメントは、当行を中核とした銀行業と八十二リース株式会社及び八十二オートリース株式会社において展開しているリース業を報告セグメントとしております。

銀行業では預金業務、貸出業務、内国為替業務、外国為替業務、債務保証、クレジットカード業務等に関して当行本部内で全体的な戦略及び計画を立案し、当行本支店及び連結子会社において事業活動を展開しております。

リース業は、事業者向けを中心にファイナンス・リース及びオペレーティング・リース事業を展開しております。

### ●報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。報告セグメントの利益は経常利益ベースとしております。セグメント間の内部経常収益は実際の取引価額に基づいております。

### ●報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

2021年3月期

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業	リース業	計				
経常収益							
外部顧客に対する経常収益	113,842	33,106	146,948	5,655	152,604	—	152,604
セグメント間の内部経常収益	1,030	489	1,519	34	1,554	△1,554	—
計	114,872	33,595	148,468	5,690	154,158	△1,554	152,604
セグメント利益	28,376	1,447	29,823	2,366	32,190	△42	32,147
セグメント資産	12,089,818	96,998	12,186,817	33,253	12,220,070	△59,431	12,160,638
セグメント負債	11,227,579	60,108	11,287,687	19,528	11,307,216	△56,273	11,250,943
その他の項目							
減価償却費	3,779	2,017	5,797	49	5,847	—	5,847
資金運用収益	77,828	52	77,880	122	78,002	△205	77,797
資金調達費用	6,830	205	7,036	21	7,057	△194	6,863
特別利益	31	0	31	—	31	—	31
特別損失	361	0	361	3	364	—	364
固定資産処分損	66	0	66	—	66	—	66
減損損失	266	0	266	0	266	—	266
税金費用	8,222	367	8,589	703	9,292	△2	9,290
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	3,298	3,581	6,879	7	6,887	—	6,887

- (注) 1. 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。  
 2. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、証券業及びベンチャーキャピタル業を含んでおります。  
 3. 調整額は、次のとおりであります。  
 (1) セグメント利益の調整額△42百万円は、セグメント間取引消去であります。  
 (2) セグメント資産の調整額△59,431百万円は、セグメント間取引消去であります。  
 (3) セグメント負債の調整額△56,273百万円は、セグメント間取引消去であります。  
 (4) 資金運用収益の調整額△205百万円は、セグメント間取引消去であります。  
 (5) 資金調達費用の調整額△194百万円は、セグメント間取引消去であります。  
 (6) 税金費用の調整額△2百万円は、セグメント間債権債務相殺に伴うものであります。  
 4. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

2022年3月期

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業	リース業	計				
経常収益							
顧客との契約から生じる収益	20,459	—	20,459	2,009	22,469	—	22,469
その他の収益	94,327	32,527	126,855	2,024	128,880	—	128,880
外部顧客に対する経常収益	114,786	32,527	147,314	4,034	151,349	—	151,349
セグメント間の内部経常収益	745	406	1,151	33	1,185	△1,185	—
計	115,532	32,934	148,466	4,068	152,534	△1,185	151,349
セグメント利益	34,928	2,098	37,026	1,060	38,087	△39	38,047
セグメント資産	13,276,694	94,943	13,371,638	27,476	13,399,114	△55,318	13,343,796
セグメント負債	12,413,457	56,645	12,470,103	13,122	12,483,225	△52,128	12,431,097
その他の項目							
減価償却費	3,468	2,040	5,508	51	5,560	—	5,560
資金運用収益	72,794	48	72,842	138	72,981	△178	72,803
資金調達費用	4,291	190	4,482	10	4,492	△173	4,318
特別利益	762	0	762	—	762	—	762
特別損失	754	0	754	0	754	—	754
固定資産処分損	451	0	451	—	451	—	451
減損損失	302	0	302	0	302	—	302
税金費用	10,308	595	10,904	303	11,208	△3	11,204
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	4,368	3,610	7,978	245	8,224	—	8,224

- (注) 1. 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。  
 2. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、証券業及びベンチャーキャピタル業を含んでおります。  
 3. 調整額は、次のとおりであります。  
 (1) セグメント利益の調整額△39百万円は、セグメント間取引消去であります。  
 (2) セグメント資産の調整額△55,318百万円は、セグメント間取引消去であります。  
 (3) セグメント負債の調整額△52,128百万円は、セグメント間取引消去であります。  
 (4) 資金運用収益の調整額△178百万円は、セグメント間取引消去であります。  
 (5) 資金調達費用の調整額△173百万円は、セグメント間取引消去であります。  
 (6) 税金費用の調整額△3百万円は、セグメント間債権債務相殺に伴うものであります。  
 4. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。